

東京藝大美術学部  
究極の思考

増村岳史

Crossmedia Publishing



現在、私は、ビジネスパーソンや一般の方々、そして企業向けに、アートやデザインを通して脳を活性化し、新たな知覚と気づきの扉を開く「アート・アンド・ロジック」という講座を主宰しています。

その中には、たとえば絵画の基本である「デッサン」を2日で描けるようになるなど、数種類の講座がありますが、いずれも私自身がファシリテーターを務め、東京藝術大学（以下、東京藝大）美術学部卒業生の画家やデザイナーの方々を美術講師に迎えて実施しているものです。

こうした講座や講演の終了後には、さまざまな方々とお話をする機会があります。そこで特徴的なのは、20代の後半から30代の前半のビジネスパーソンを中心に、「美術系の大学

院に入学して、MFA(マスター・オブ・ファインアート＝美術学修士号)を取得したい」という相談が徐々に増えていることです。

美術系大学の卒業生ならばまだしも、一般の大学を卒業し、ビジネスの最前線で日々、活躍されている方々からこうした話が出ています。そのことに驚くとともに、「やっと日本でも、アートをビジネスに活かす時代の扉が開き始めたのだ」と心の中で確信を深くしています。

## MFAがMBAに取って代わる？

『MFA is New MBA』という一文をご存じでしょうか？これはアメリカの著名な文筆家であるダニエル・ピンクが「ハーバード・ビジネス・レビュー」で2004年に書いた論文のタイトルです。この論文の要旨は、「複雑化した現代社会において、アートの力を身につけることは、経営学を学ぶことに匹敵する。もしくはそれ以上に重要になってきている」というものです。

この論文から4年を経た2008年に、「ニューヨーク・タイムズ」にダニエル・ピンクのインタビュー記事が掲載され、この『MFA is New MBA』という一文が当時のビジネス

界で話題になりました。

思い起こしてみると、同じ2008年の9月にリーマン・ショックが起こり、世界規模の金融危機が発生しました。きっかけは、サブプライムローンの不良債権化によるものです。至極簡潔にまとめると、このリーマン・ショックは、「ロジックに基づいた金融工学の破綻」を象徴するような事件だったといえるでしょう。

今まで誰もが信じて疑わなかった「ロジック」だけでは、この先、どうにもならないということに、大きな代償と引き換えに世界中の人々が気づいたのです。

こうして世界経済が大きく落ち込んでいる中で、好業績をマークしている会社があります。それは皆さんもご存じのアップルです。

アップルは、2007年に「スマートフォンの代名詞」ともいえるiPhoneを発売し、世界をあっと言わせました。翌2008年(まさにリーマン・ショックのとき)には、アプリケーションを販売する「App Store」がカットオーバーし、1日あたり平均100万ドルの売上を記録したといえます。

1997年に復活を遂げ、アップルを牽引していたステイブ・ジョブスは、この翌年

に病気の治療に専念するために休職しますが、残念ながら2011年に帰らぬ人となってしまいました。

彼は結果として偉大なる経営者でしたが、むしろ「偉大なるアーティスト」して、皆さんの記憶に残っているのではないのでしょうか？彼自身も自らをアーティストのひとりとして捉えて、次のような名言を残しています。

「深刻に考えすぎないことだ。アーティストとして創造的な生き方をしたいのなら、あまり後ろを振り返らぬようにすべきなんだ」

世界経済がどん底を迎えていた中でのアップル躍進の原動力は、テクノロジーとアートの融合にあったのです。

ダニエル・ピンクが論文「MFA is New MBA」を発表してから15年以上が過ぎました。現在、ビジネスにおいてアートの果たす役割はとて大きくなっています。

デザイン思考やアート思考などの思考体系は、ビジネスの分野で活用されていますし、そもそもはデザイン用語である、UI（ユーザーインターフェイス）やUX（ユーザーエクスペリエンス）は今や一般名詞化しています。

事実、アメリカではMFAホルダーがビジネスを牽引しています。

IBMには1700人以上のデザイナー職の人々がいますし、Amazonのユーザーインターフェイスが秀逸なものも、社員デザイナーを多く抱えているからです。

これらの会社の中で、ディレクターとしてデザイナーをマネジメントしているのが、まさにMFAホルダーなのです。

また、彼らは高額なギャランティをもつて企業に迎えられます。なぜなら稀少価値があるからです。アメリカにおいても日本同様、美大を目指す人は決して多くはいませんし、ましてや美大の大学院に進学する人など稀少まれな存在です。

稀少価値で、かつ現代のビジネスにおいては、その専門性を活かしてハイパフォーマンスを発揮できる人たちですので、当然のことながら報酬も高いわけです。

### コロナ禍にあってもブレない、東京藝大で学んだ人たちの言葉

今、日本を含め世界中が、これまで体験したことのない未曾有の危機に直面しています。実際、東京藝大美術学部の卒業生である私の講座の講師陣や知り合いのアーティストたちも、予定されていた展示や個展が次々に延期・日程変更などの憂き目に遭っています。

そうした藝大卒のアーティストのひとりと、つい先日、リモートで会話をしたのですが、驚いたことに、開口一番の言葉は「やることは一切、変わっていない」でした。

また、以前に講師をお願いしていた、同じく藝大美術学部出身のアーティストの方との最近の会話の中で、印象深かったひと言は、「終わりや結論の見通しを立てず、永遠を受け入れる」ということでした。

つまり彼らは、周りの環境がいかに変わろうと、すべて自らの意志に基づき、ブレることなく自身の「仕事」を続けています。常に今ある事実を受け入れつつ、「自分への問い」を発し続けながら日々を過ごしているのです。

教育環境は少なからず個々のパーソナリティに影響を与えます。

のちほど本文で詳細を記していきますが、東京藝大美術学部において、一般の大学と最も異なるその特徴は、極力、教えずに「見守る」ことにあります（もちろん、質問を受けたら、先生方は懇切丁寧に指導をするそうです）。

卒業までの単位の7割以上は、講義への出席やテストではなく、自身の手で作上げた作品の提出によるものです。とことんまで「自ら考える」ことを常に促している、日本では

類<sup>な</sup>い稀<sup>まな</sup>な学<sup>まな</sup>び舎<sup>や</sup>であると思います。

## 予想もしなかった再会

実は私が「アート・アンド・ロジック」の講座を始めたことも、講座の美術講師陣が皆、東京藝大の美術学部出身であるのも、偶然がいくつも重なり合っただけの結果です。

私は以前から、展覧会やギャラリーのまとめサイトなどを見て、気に入った作品が見つかれば、なるべく足を運ぶようにしていました。8年ほど前のある日、「これはぜひとも実物を見たい」と強く感じた作品に出会いました（こんなことはめったにありません）。

作家名をチェックすると、この作品を制作した作家、なんと私が15年以上会っていないなかった親戚（はとこ）だったので。

残念ながら作品をサイトで見たときには、すでに彼女の展示は終了してしまっていました。私は実家に電話して彼女の連絡先を教えてもらい、15年ぶりの再会をすることになったのです。会った当時は東京藝大大学院の美術研究科工芸専攻の修士課程を修了したばかりでした。

再会といっても、最後に会ったのは彼女が12歳くらいので、実質的にはほぼ初対面に近い状況でした。そこから十数年ぶりの交流が始まり、埼玉にあるはこの家を訪れることになりました。

彼女のお父さん（つまり私の父のいとこ・従叔父<sup>じゅうしよくふ</sup>）は漆芸の重要無形文化財保持者、いわゆる人間国宝で、東京藝大で教えていましたが、すでに退官して名誉教授となっていました。家は自宅兼工房でした。

久々に従叔父に挨拶をし、応接間に通されました。

そこには1枚の絵が展示されていました。その絵が私の琴線に触れたので作家名を聞いたところ、はこの同級生で、藝大の絵画科油画専攻（一般的な美大でいう油絵科にあたる学科）にいるOさんという画家の作品でした。彼のほかの作品も観たくなつた旨をはとこに伝えたところ、車で20分ほどのところにアトリエがあるそうで、彼女の運転で行ってみることにしたのです。

そこは2階建ての廃工場をリノベーションした空間で、1階がアトリエ、2階が住居となっていました。その場所は当時、4人の画家たちの共同アトリエであり、2人の画家の

住居も兼ねていました。

この日を境に、はとこの家に展示されていた絵を描いた画家のOさんと親しくなりました。当時、彼は東京の新宿三丁目にある画材屋「世界堂」でアルバイトをしていたので、よくアルバイトが終わった後に新宿近辺で飲むようになり、アトリエにもたびたび訪れるようになりました。そうしているうちに、共同アトリエで彼と寝食をともにしている画家のIさんとも仲良くなりました。彼と私はレコード収集という共通の趣味があり、音楽仲間として親しくなりました。

2人と親交を深めていくうちに、彼らの思考、そして考え方や視点のユニークさに何度も驚かされました。そして何ととっても、年齢でいうと私より20歳以上も年下なのにもかかわらず、絵を通じて「世の中にない新たな価値」を日々、創り上げていくその姿勢・態度（彼らは当時、「アティチュード」と呼んでいました）と情熱に感銘を受けました。

こうして藝大美術学部の卒業生たちとの交わりを深める中で私は、彼ら芸術家たちの持つ思考こそが、日本でビジネスに携わる人たちに必要なのではと考え始めます。そして、ピ

ジネスパーソンに向けて「デッサンを描くことによって新たな知覚の扉を開く」という講座プログラムのアイデアが浮かんだのです。

### 多彩な人々が学ぶ「究極の学び舎」

彼ら2人と彼らの先輩である女流画家のYさんの協力を得て、半年間をかけてこのアイデアを実現するプログラムが完成しました。前述のように、私がファシリテーションを担当し、藝大卒業生が美術講師を務めるという形です。一部の講師の方は、今でも私の講座で指導にあたっていました。

さらには、彼らや私のはとこを通じて、多くの藝大美術学部の現役学生や卒業生たちと親しくなりました。

また、私が以前に勤務していた会社の後輩を仲立ちにして、藝大のデザイン科の卒業生であるSさんとも知り合いました。卒業後にアメリカのニューヨークに渡り、MFAを取得したのちに14年半、現地でデザイナー、アートディレクター、クリエイティブディレクターを務めた後に日本に帰国し、ナイキジャパンのゴルフ部門で11年間にわたってブラン

ドデザインディレクターを務めた方です。ちなみにSさんも現在、私が主宰しているアート・アンド・ロジックの講師をはじめ、企業向けのデザイン研修やブランディングの仕事などのお手伝いもしていただいています。

加えて、Sさんの藝大時代の後輩のデザイン科の教授や、企業経営者とも知り合いになるなど、交流は年を経るにつれて大きく広がっています。

こうして幅広い年齢層の東京藝大関係者と懇意にさせていただいて、はや7年ほどが経ちました。

すでに亡くなっていますが、私の父は画家であり、先ほども少し触れたとおり、父方に芸術家が多い芸術家系に育った私ですが、芸術とはほぼ無縁の一般大学の経済学部に進み、一般企業に就職し、20年ほど会社勤めをしました。

アーティストである彼ら彼女らと出会うまでは、私の周りには一般企業に勤務する社会人しかいませんでした。一時期、企画制作部門にいた頃は、美大卒のデザイナー職の人たちとビジネス上で仕事を一緒にすることがありましたが、キャリアの多くの時期は決してそうではありませんでした。

あらためてこの7年間を振り返ると、何十人、いや2桁では済まないくらいの藝大生や卒業生、そして従叔父を含めて現役教員や教員経験者の方々ともお会いし、東京藝大にも足繁く通いました。

「奇人変人たちの集まり」「最後の秘境」などなど、魑魅魍魎のごとく奇怪なイメージさえつきまといっていますが、単に「奇人変人」という言葉だけで片付けてしまうのはもったいな  
いほど、ユニークでバラエティ豊かな人々が学ぶ究極の学び舎、それが東京藝大美術学部  
なのです。

これから、私が実際に肌で感じた東京藝大美術学部を解体していききたいと思います。

2021年4月

増村岳史

東京藝大美術学部  
究極の思考  
目次

はじめに 3

## 序章

# 偏差値教育を「越境」した人たちが 集まる唯一無二の大学

出身高校の偏差値で40〜70台までが集う日本で唯一の最高学府

24

アートを学ぶことは「自分ごと化」を突き詰めること

重要なのは「本質的な思考力」 29

アート思考・デザイン思考はビジネスツールだけではもったいない／本書の構成について

## 第1章

# 究極の思考力入試 問われるのは、「自分」とは何か？

そもそも「美大を目指す」というのはどんなことか 36

バラエティ豊かな合格者、志望者のバックグラウンドもさまざま／1浪、2浪は当たり前

対策の立て方がない、「傾向」のない超難関入試 42

過去の入試問題はどんなものか／「出題意図」を読んでみる／多浪生が多い理由と、  
入学年度によって異なる学生のキャラクタ―

入試から読み解く東京藝大の視点① 「考える」とは何か？ 52

文学部を卒業後に実践を学びたくなり受験を決意／絵を描く時間と同じぐらいの時  
間を読書に費やし合格／藝大生と一般大学生との違いとは？

入試から読み解く東京藝大の視点② 「自分の表現」とは？ 62

中2の時点で藝大受験を決意／そして、いよいよ受験本番／落ちたら死ぬ――必死  
のリベンジへ／合格後の自己分析

入試から読み解く東京藝大の視点③ 「感じとる身体性」とは何か？ 78

勉強嫌いの少年はなぜ、藝大を目指したのか？／「やんちゃ」な中学生に先生がすめてくれた進路／美術科高校というカオスで、文武両道ならぬ美武両道を追求／デッサンをする意味とは？／「上手い絵」ではなく「目立つ絵」を描く／かつてない屋外での2次試験、しかも会場は……／過酷な試験最終日／答えが用意されているものに興味が湧かない／考えるよりも感じる

## 第2章

# 何を教わり、何を学ぶのか —— ひたすら考え、カタチにしていく4年間

「自己の表現」をひたすら追求していく「絵画科油画専攻」 98

入学後の課題は、半年をかけての「毒抜き」と上手い絵からの脱却／ダイバーシティ&インクルージョンな“場”／とある教授の毒のある入学スピーチ「卒業してから地獄が待っている」／卒業単位の7割は実技、作品そのものが単位／破天荒な課題

複数の学科・専攻の学生が学ぶユニークな科目 109

ユニークな共通科目その1 美術解剖学／ユニークな共通科目その2 古美術研究旅行／多くの学生が絵を描かないで(？)卒業する油画専攻／油画専攻と対極に位置する絵画科日本画専攻

モチーフをリアルに描写する力で合否が決まる日本画専攻 116

受験デッサンを捨てろ——日本画専攻の場合／日本画の「守」／日本画は矛盾の塊!?  
／保守的な世界だからこそ生まれるイノベーション／自画像を描く意味

何を教え、何を教えないのか

——東京藝大名誉教授・佐藤一郎さん

125

入試は「受験生と大学側との闘い」である／「見守る」という教育方針／テクノロジー  
が発達すればするほど「手仕事」がより大切になる

### 第3章

## 「学び」と「気づき」を ビジネスに活かす卒業生たち

アーティストからビジネスパーソンへと  
キャリアアチェンジを行った卒業生たち

138

テクノロジーとアートを統合する経営者の原点は学生時代に

140

株式会社メディアギルド代表取締役・坂本博史さん

1浪する予定だったのに現役で合格してしまった／プロデュース活動で多忙な「作品を作らない」藝大生／「藝大始まって以来の快挙」を実現／アートの世界から一転、STEMインテグレーターの世界へ／入社10年目でのリストラ体験／起業と会社の展開／「キャリアアの賞味期限」という考え方

建築科に学び、会社員や起業を経て熟成した非連続キャリア

161

丸尾経営教育研究室代表・丸尾聰さん

大学院に入学直後に参加させられた「取り壊し反対運動」からの学び／五感で感じる「実測」という授業／建築デザインは論理と時間の設計が重要／建築こそ、アート（芸術）とロジック（論理）の融合／経営コンサルティング会社での3つの気づき／新たな事業分野を立ち上げて起業に至る／シンクタンクの立ち上げメンバーの一員に／リサイクル産業を創出する／のべ500社の新規事業創発に関わったユニークな手法とは？／「広義のデザイン」の実践・先駆者として／非連続キャリアの原動力となる力とは

助手、アーティストを経て保険会社のトップ営業へ転身

193

ソニー生命保険シニアライフプランナー・玄昌國さん

苦学を経て藝大に入学し、助手を経て彫刻家となる／未練なく彫刻家を辞め、ライフプランナーに転身／トップセールスマンでありながら問題児／才能の定義／仕事の純度を上げるといふこと／見ようとしなないと何も見えない／重層的な思考と単層的な思考／家庭教育の希薄化で思考が単層化してしまっている／何事も、感じて考える態度（アティチュード）が重要

## 第4章

# これからは「アートフルな人材」が 日本を引っ張っていく

今の高校生に最も欠如しているものとは？ 220

美術科の高校生は目が輝いている！／自らSTEAMを実践するアートフルな高校生／退路を断たなければならない藝大受験

海外の美大入試はどんなものなのか 233

イギリスのアート教育と美大入試／アメリカのアート教育と美大入試／燃えたぎるよ  
うな内的モチベーションを引き出すために／思考の重層化と自身の態度（アティチュード）

アートが持つ理力（フォース） 242

①言語と非言語、具象と抽象を網羅する理力／②好奇心を持ち、問う理力／③熱狂  
的に没頭できる理力

おわりに 芸術家を活かさない国に未来はない 250

参考文献 255